

聖母女子短期大学紀要

第 2 号

1 9 8 8

聖母女子短期大学

【原 著】

看護学生の自尊感情と 学習環境に関する研究 (その2)

<The Study on Self-Esteem
and Learning Environment of Nursing Students (No.2)>

聖母女子短期大学

和田サヨ子 (Sayoko Wada)

筒井真優美 (Mayumi Tsutsui)

沢 禮 子 (Reiko Sawa)

聖路加看護大学 St. Luke's College of Nursing

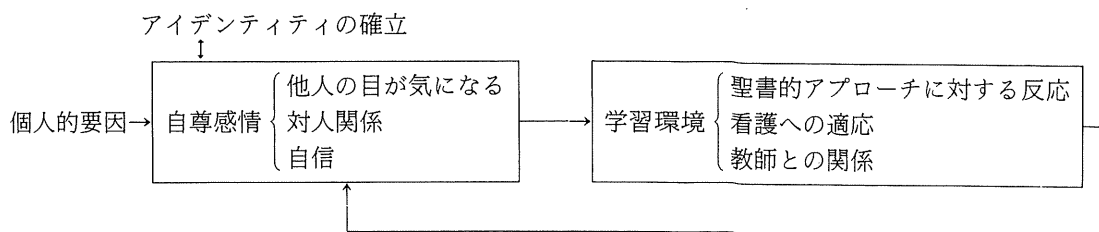
高木 廣文 (Hirofumi Takagi)

I. はじめに

看護学生の学習環境は、知識・態度・精神運動
領域における教師とのかかわりが濃厚である。臨

床という看護実践の場としての学習環境、カリキ
ュラムの大半を占めている。したがって、看護学
生の学習効果を高めるための学習環境は、重要な
因子と考えられる。(表1)

表1 自尊感情と学習環境の関連



自尊感情と学習環境の相関関係については「私
立看護大生への質問紙による因子分析」の調査で報
告した。¹⁾すなわち自尊感情尺度の高い人ほど、
学習環境を肯定的に受容しており、自尊感情尺度
の低い人ほど、学習環境を否定的に受けとめる傾
向があることを示唆する結果を得た。また以上の
継続調査として、本学の看護学生の自尊感情と学
習環境の受容に関する因子を調査し、その相関関
係については、類似した調査結果を報告した。²⁾
そこで今回は、前回の調査結果で課題とされた項
目についての継続的調査を実施したのでその結果
を報告したい。

II. 対象と方法

本学の3年制看護短大生、1年生43名、2年生
38名、3年生37名、合計118名を対象とし、1985

表2 調査時期別、学年別 対象者数

学年	時期	
	7 月	3 月
1 年 (人)	42	43
2 年 (人)	38	36
3 年 (人)	35	37
計 (人)	115	116

表3 学年間で有意差が認められた項目（7月）

項 目		学年	百分率			* P<0.05 ** P<0.01 χ^2
			はい	ときどき	いいえ	
教師との関係	Q27 先生とのコミュニケーションに満足	1	31.0	50.0	19.0	15.255**
		2	18.4	42.1	39.5	
		3	0	60.0	42.0	
	Q31 学校で相談できる先生がいる	1	35.7	47.6	16.7	10.706*
		2	42.1	47.4	10.5	
		3	22.9	37.1	40.0	
看護への適応	Q24 看護職は自分をいかす	1	73.8	23.8	2.4	10.593*
		2	47.4	34.2	18.4	
		3	45.7	42.9	11.4	
	Q25 実習が好き	1	66.7	23.8	9.5	10.213*
		2	47.4	34.2	18.4	
		3	31.4	51.4	17.1	
	Q26 自己学習は適量	1	26.2	52.4	21.4	21.104**
		2	13.2	28.9	57.9	
		3	0	37.1	62.9	
聖書的アプローチに対する反応	Q34 聖書は感謝の念を増させる	1	69.0	28.6	2.4	14.864**
		2	78.9	13.2	7.9	
		3	40.0	45.7	14.3	
	Q38 朝の祈りは力を与える	1	47.6	40.5	11.9	10.85*
		2	52.6	34.2	13.2	
		3	22.9	42.9	34.3	
	Q39 夕の祈りは感謝を与える	1	47.6	40.5	11.9	14.539**
		2	60.5	31.6	7.9	
		3	28.6	42.9	28.6	
	Q40 朝礼により自己肯定	1	35.7	54.8	9.5	9.894*
		2	47.4	36.8	15.8	
		3	17.1	57.1	25.7	

表4 学年間で有意差が認められた項目 (3月)

項 目		学年	百分率			* P<0.05 ** P<0.01 χ^2
			はい	ときどき	いいえ	
自尊感情	Q 3 いつかは尊敬される	1	20.9	55.8	23.3	14.070**
		2	2.9	62.9	34.3	
		3	0	59.5	40.5	
	Q 7 自分の能力への自信	1	14.0	72.1	14.0	19.423**
		2	0	42.9	57.1	
		3	13.5	59.5	27.0	
	Q 8 うまくやれることはない	1	20.9	41.9	37.2	11.286*
		2	22.2	69.4	8.3	
		3	16.7	44.4	38.9	
看護への適応	Q24 看護職は自分をいかす	1	79.1	20.9	0	10.413*
		2	47.1	41.2	11.8	
		3	59.5	32.4	8.1	
	Q25 実習が好き	1	69.8	27.9	2.3	12.352*
		2	31.4	54.3	14.3	
		3	51.4	37.8	10.8	
	Q32 看護職に誇り	1	93.0	4.7	2.3	12.161*
		2	66.7	30.6	2.8	
		3	78.4	13.5	8.1	
聖書的アプローチに対する反応	Q34 聖書は感謝の念を増させる	1	90.7	9.3	0	11.770*
		2	63.9	33.3	3.8	
		3	59.5	37.8	2.7	
	Q35 聖書は看護職に対する誇りを増させる	1	74.4	23.3	2.3	9.736*
		2	44.4	47.2	8.3	
		3	45.9	48.6	5.4	
	Q36 聖書は看護職を「天職への召命」とする	1	62.8	34.9	2.3	10.886*
		2	38.9	38.9	22.2	
		3	40.5	48.6	10.8	
	Q37 聖書は臨床場面で判断の指針	1	37.2	60.5	2.3	10.888*
		2	31.4	42.9	25.7	
		3	21.6	62.2	16.2	
	Q44 聖書による葛藤	1	44.2	39.5	16.3	13.928**
		2	22.2	52.8	25.0	
		3	8.1	62.2	29.7	

年7月(夏休み前)1986年3月(学期末)の2回にわたり、質問紙による調査を行った。欠席者を除いて回収率は、100%であった。(表2)

質問紙は46項目からなり、自尊感情の測定は、信頼性の検討がなされている遠藤ら³⁾の自尊感情尺度項目を使用し、学習環境としては、教師や友人との人間関係、看護への適応、さらに、日常生活における聖書的アプローチに対する反応に関する項目を設定した。

分析は、調査時期と学年により、各項目間のクロス集計を行った。次に因子分析(バリマックス法)を行い、さらに抽出した因子得点を求め、各学年間での差を調べるために分散分析を行った。

III. 結 果

1. 調査時期別、学年別による

各項目間のクロス集計

各項目を学年および調査時期別にクロス集計し、有意差のみられた項目を表3、4に示した。

1) 7月のデータ

学年間で有意差が認められた項目(7月)は、表3に示したように看護への適応に関しては、1年が高く、3年が低くなっている。聖書的アプローチに対する反応は、2年で肯定的な割合が高く、3年が低くなっている。教師との関係は、3年が低くなっている。

2) 3月のデータ

学年間で有意差が認められた項目(3月)は、表4に示したように看護への適応に関しては、1年が高く、2年が低くなっている。2年は7月より低くなっている。聖書的アプローチに対する反応は、1年で肯定的な割合が高い。自尊感情は1年が高い。

2. バリマックス法による因子分析

バリマックス法による因子分析の結果、7月、3月のデータで各々7つの因子が抽出された(図1、図2参照)。第1因子は、「聖書は感謝の念を増させる」「聖書は看護職に対する誇りを増させる」など『聖書的アプローチに対する肯定的反応』に関する因子と考えられる。第2因子は、「人の思いが気になる」「人が自分を好んでいるか気になる」など『他人の目が気になる』に関する

因子と考えられる。第3因子は、「実習が好き」「看護職に誇り」など『看護への適応』に関する因子と考えられる。第4因子は、「人との話題に困る」「初対面の人との話がむずかしい」など、『対人関係のむずかしさ』に関する因子と考えられる。第5因子は、「聖書と自己の不一致による葛藤」「聖書によって人間関係が気になる」など、『聖書による葛藤』に関する因子と考えられる。第6因子は、「価値あるものは何かと疑う」「自分の能力への自信」など、『自信がない』に関する因子と考えられる。第7因子は、「先生とのコミュニケーションに満足」「先生とのコミュニケーションがある」など『教師とのコミュニケーション』に関する因子と考えられる。

これら7つの因子の累積寄与率は、48%(7月のデータ)、45.9%(3月のデータ)であり、7つの因子により説明できない46項目のばらつきは、まだ50%以上ある。

3. 因子得点の学年別、調査時期別の分散分析

各学年、また同学年による7月と3月の各因子の差を調べるために、因子得点を求め、分散分析を行い(表5、6参照)、各学年ごと、調査時期による因子得点の平均値を図3に示した。

3月のデータは、寄与率の高い順ではなく、7月の結果と符合するようにその順序を一部並びかえた。有意差の認められた因子は、下記の通りである。第1因子『聖書的アプローチに対する肯定的反応』において、各学年間に7月、3月ともに有意差が認められた。7月の平均値は、2年が最高であり、3年が最低である。3月の平均値は1年が最高であり、2年が低下している。第3因子『看護への適応』において、7月の各学年間に有意差が認められた。平均値は1年が最高であり、2年が最低である。有意差は認められなかったが、3月の調査時期では、2年がさらに低下している。第7因子『教師とのコミュニケーション』において、7月の各学年間に有意差が認められた。平均値は1年が最高であり、3年が最低である。3月の調査時期では、3学年の差が小さくなる傾向を示していた。

有意差は認められなかったが、2年は7月から3月にかけて、他人の目が気になり、自信がなくなるなど、自尊感情が低下している傾向がみられる。また、2年は7月から3月にかけて看護への適応、聖書的アプローチに対する肯定的反応が低

図1 バリマックス法による因子分析の結果 因子負荷量0.3以上の項目 [7月のデータ]

図1-a 第1因子 (寄与率10.5%)

〈聖書的アプローチに対する肯定的反応〉

- Q39 タの祈りは感謝を与える
- Q34 聖書は感謝の念を増させる
- Q38 朝の祈りは力を与える
- Q35 聖書は看護職に対するほこりを増させる
- Q40 朝礼により自己肯定
- Q42 人間関係は聖書が基盤
- Q41 聖書はケアの指針
- Q36 聖書は看護職を「天職への召命」とする
- Q29 学校での年般困難に満足
- Q37 聖書は臨床場面の判断基準指針
- Q32 看護職に誇り
- Q31 学校で相談できる先生がいる

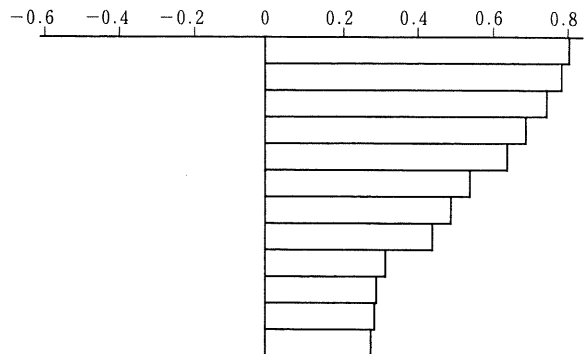


図1-b 第2因子 (寄与率7.8%)

〈他人の目が気になる〉

- Q23 人の思いが気になる
- Q19 人が自分を好んでいるのか気になる
- Q22 自分をよく思っていない人がいるのではないかと気になる
- Q9 他の人とやっていけるか気になる
- Q21 反対意見の人を説得している時、人の思いが気になる
- Q15 人の目が気になる
- Q11 人の中へ入っていくことへの不安
- Q10 人の批評が気になる

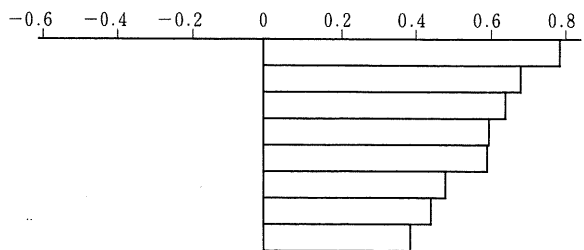


図1-c 第3因子 (7.1%)

〈看護への適応〉

- Q25 実習が好き
- Q24 看護職は自分をいかす
- Q32 看護職に誇り
- Q33 勉強は楽しい
- Q3 いくつかは尊敬される
- Q2 自分は価値ある人間
- Q31 学校で相談できる先生がいる

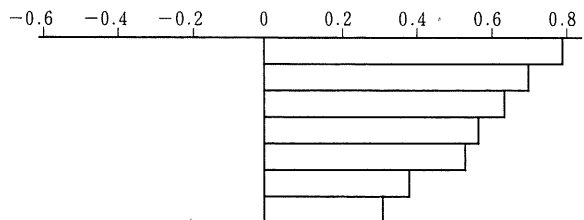


図1-d 第4因子 (寄与率6.2%)

〈対人関係のむずかしさ〉

- Q16 人との話題に困る
- Q18 初対面の人との話がむずかしい
- Q13 グループの前で話すと平安になる
- Q11 人の中に入っていくことへの平安がある
- Q30 学校で相談できる友人が5人以上
- Q12 人の前ではにかむ
- Q29 学校での友人関係に満足

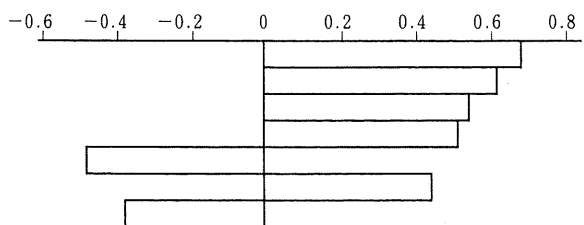


図1-e 第5因子 (寄与率5.9%)

〈聖書による葛藤〉

- Q46 聖書と自己の不一致による葛藤
- Q45 聖書によって人間関係が気になる
- Q44 聖書による葛藤
- Q43 聖書によって平安
- Q42 人間関係は聖書が基盤
- Q8 うまくやれることはない
- Q30 学校で相談できる友人が5人以上

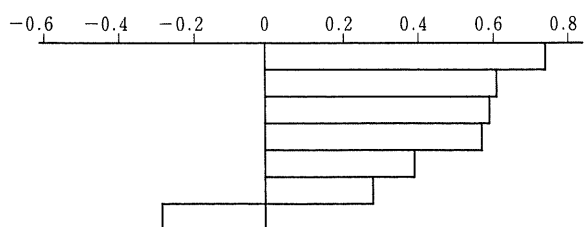


図1-f 第6因子 (寄与率5.5%)

- Q 6 自己嫌悪
Q 5 価値あるものは何かと疑う
Q 7 自分の能力への自信
Q 2 自分は価値ある人間
Q 13 グループの前で話すと平安
Q 44 聖書による葛藤

〈自信がない〉

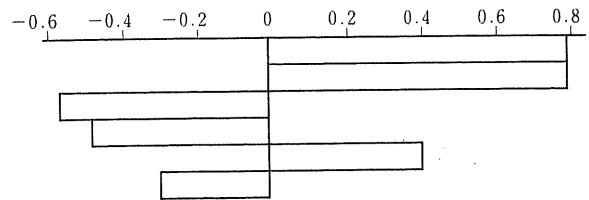


図1-g 第7因子 (寄与率5.0%)

- Q 27 先生とのコミュニケーションに満足
Q 26 自己学習は適量
Q 28 先生とのコミュニケーションがある
Q 31 学校で相談できる先生がいる

〈教師とのコミュニケーション〉

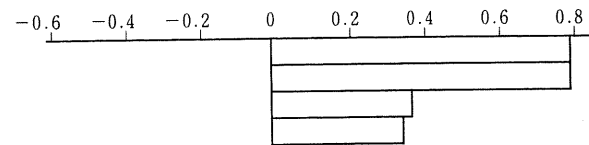


図2 バリマックス法による因子分析の結果 因子負荷量0.3以上の項目 [3月のデータ]

図2-a 第1因子 (寄与率12.1%)

- Q 35 聖書は看護職に対する誇りを増させる
Q 36 聖書は看護職を「天職への召命」とする
Q 41 聖書はケアの指針
Q 42 人間関係は聖書が基盤
Q 34 聖書は感謝の念を増させる
Q 37 聖書は臨床場面で判断の指針
Q 38 朝の祈りは力を与える
Q 40 朝礼により自己肯定
Q 32 看護職に誇り
Q 33 勉強は楽しい
Q 45 聖書によって人間関係が気になる
Q 26 自己学習は適量
Q 25 実習が好き
Q 24 看護職は自分をいかす

〈聖書的アプローチに対する肯定的反応〉

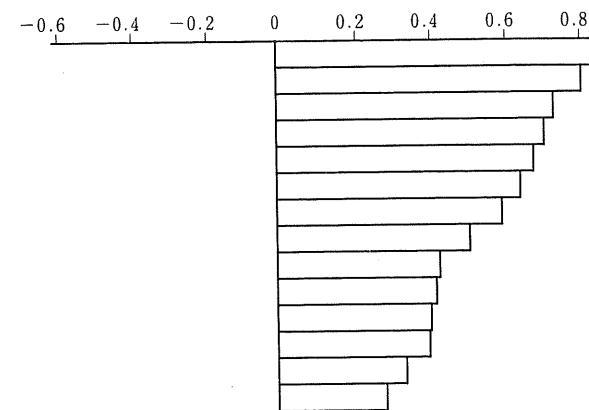


図2-b 第2因子 (寄与率7.9%)

- Q 23 人の思いが気になる
Q 19 人が自分を好んでいるのか気になる
Q 22 自分をよく思っていない人がいるのではないかと気になる
Q 21 人を説得している時、人の思いが気になる
Q 10 人の批評が気になる
Q 12 人の前ではにかむ
Q 15 人の目が気になる
Q 14 人前でのゲームを気にする
Q 11 人の中に入っていくことへの不安
Q 9 他の人とうまくやっていけるか気になる
Q 6 自己嫌悪

〈他人の目が気になる〉

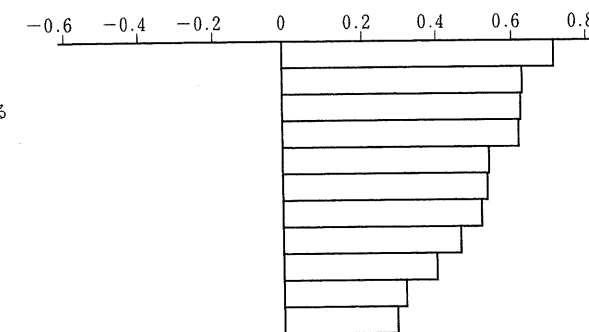


図2-c 第3因子 (寄与率5.4%)

- Q 25 実習が好き
Q 32 看護職に誇り
Q 40 朝礼により自己肯定
Q 47 実習場の人間関係で脅え
Q 24 看護職は自分をいかす
Q 4 ミスは自分のせい
Q 33 勉強は楽しい
Q 48 患者とのコミュニケーションに緊張

〈看護への適応〉

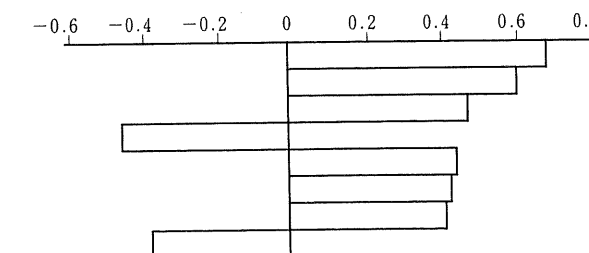


図2-d 第4因子 (寄与率4.4%)

〈対人関係のむずかしさ〉
Q18 初対面の人との話がむずかしい
Q16 人との話題に困る
Q12 人の前ではにかむ

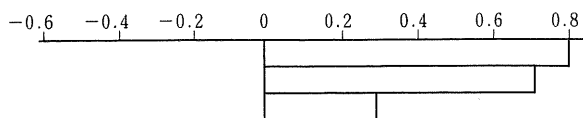


図2-e 第5因子 (寄与率4.9%)

〈聖書による葛藤〉
Q46 聖書と自己の不一致による葛藤
Q43 聖書によって不安
Q45 聖書によって人間関係が気になる
Q44 聖書による葛藤
Q17 失敗が気になる
Q1 劣等感
Q9 他の人とうまくやっていけるか気になる

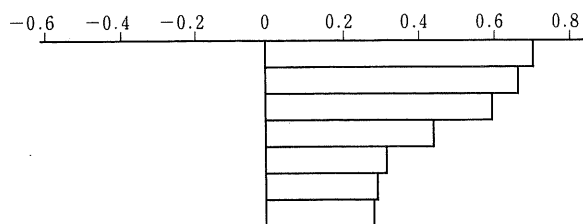


図2-f 第6因子 (寄与率5.9%)

〈自信がない〉
Q5 価値あるものは何かと疑う
Q7 自分の能力への自信
Q8 うまくやれることはない
Q1 劣等感
Q2 自分は価値ある人間
Q17 失敗が気になる
Q24 看護職は自分を生かす
Q15 人の目が気になる

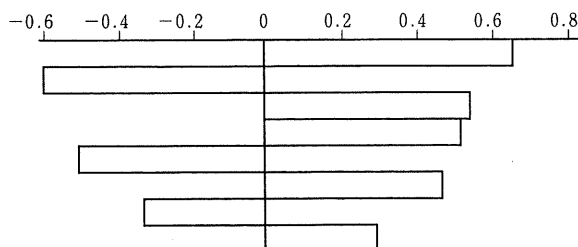


図2-g 第7因子 (寄与率5.2%)

〈教師とのコミュニケーション〉
Q28 先生とのコミュニケーションがある
Q27 先生とのコミュニケーションに満足
Q31 学校で相談できる先生がいる
Q13 グループの前で話す不安
Q47 実習場の人間関係で脅え

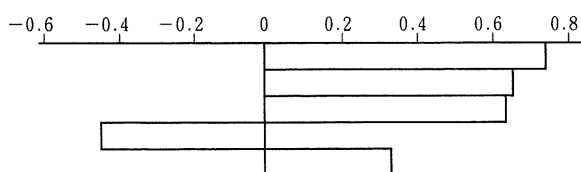


表5 7月の学年毎の各因子得点の平均値

* P<0.05
** P<0.01

		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	第7因子
1年 (n=42)	平均値	0.099	0.188	0.382	0.183	0.006	-0.049	-0.287
	SD	0.816	0.865	0.715	0.865	1.134	1.005	1.069
2年 (n=38)	平均値	0.300	-0.124	-0.227	-0.121	-0.162	0.110	0.013
	SD	1.000	1.105	1.193	1.023	0.822	1.052	0.974
3年 (n=35)	平均値	-0.445	-0.092	-0.212	-0.088	0.169	-0.062	-0.358
	SD	1.039	0.993	0.924	1.085	0.963	0.918	0.802
3学年のF値		5.811**	1.182	5.130**	1.111	0.994	0.342	4.181*

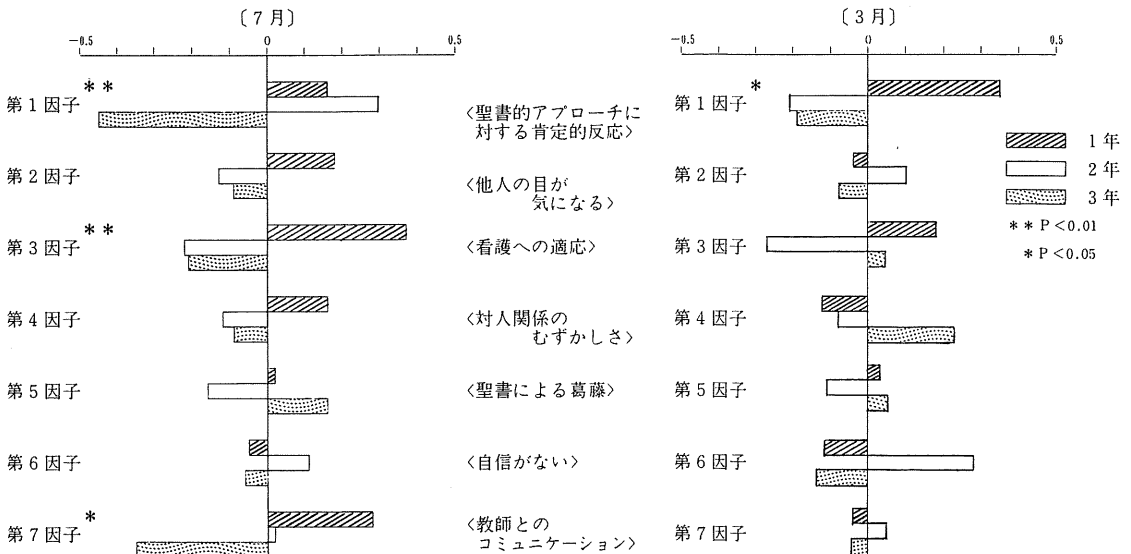
表6 3月の学年毎の各因子得点の平均値

		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	第7因子
1年 (n=43)	平均値	0.342	-0.027	0.199	-0.120	-0.056	-0.120	-0.020
	SD	0.774	0.983	0.848	0.984	1.117	1.091	0.964
2年 (n=36)	平均値	-0.209	0.104	-0.278	-0.081	-0.118	0.282	0.048
	SD	1.101	1.018	0.947	0.912	0.952	0.778	0.976
3年 (n=37)	平均値	-0.193	-0.070	0.039	0.218	0.050	-0.135	-0.024
	SD	1.020	0.992	1.131	1.061	0.883	1.018	1.050
3学年のF値		4.180*	0.295	2.328	1.306	0.356	2.104	0.060

* P<0.05

** P<0.01

図3 7月, 3月の学年毎の各因子得点の平均値



下しており、教師とのコミュニケーションも多い方でない。

IV. 考 察

因子分析による結果と、クロス集計の結果すなわち、(1)自尊感情、(2)聖書的アプローチに対する反応、(3)看護への適応、(4)教師とのコミュニケーションについて以下に考察を加える。

1. 自尊感情

1年の自尊感情が高いのは、1年次において実習が少なく実習内容においても教師に対する依存

度の高い実習内容に起因すると思われる。すなわち1年次の実習内容は、学生にとって満足感・充実感が高いことが、考えられる。有意差はないが、2年次の7月から3月にかけて他人の目が気になり、自信がなくなるなど自尊感情が低下する傾向がみられる。これは実習内容は複雑になり、自分自身を意識する看護場面が多様化していくことが考えられる。学習環境と自尊感情の相関関係は、自尊感情尺度が高い場合、学習環境を肯定的に受けとめる傾向があり、逆に自尊感情尺度が低ければ、学習環境を否定的に受けとめる傾向が、調査結果で示唆された。^{4) 5)} 自尊感情は、学習環境の受容に関係するとともに、学習環境が学生の自尊

感情にも関係していると思われる。2年次の自尊感情の低下していく時期のサポートについては、前回の調査においても課題であったため強化したアプローチの効果を「看護への適応」の項で述べる。

2. 聖書のアプローチ

7月は2年が肯定的反応を示し、3月は1年が肯定的な反応を示し、2年が低下している。教育理念の理解へのアプローチは、1年にとってアイデンティティの確立、看護観、さらに自分の歩むべき目標を明確化していくために重要と考えている。2年後期から3年になると、教育理念は各々の中に定着し、むしろアプローチそのものより、それを看護実践の中でどういかしていくかが各々の課題になっていくものと思われる。

3. 看護への適応

7月、3月ともに、1年の適応が高く、2年は7月の平均値が学年の中で最低であり、3月はさらに低下している。有意差は認められなかったが、2年は7月、3月に自尊感情が低下し、看護への適応、聖書のアプローチに対する肯定的反応が低下しており、教師とのコミュニケーションも多い方ではない。このことから、高学年ほど実習に対する不適応の高いことが推測される。Q26.「自己学習が適量か」、に対する7月の3年生の反応からも考えられる。また教師との関係においても裏付けられているように、高学年の教師に対する反応が低いことから援助が稀薄であることを示していると考ええる。

高学年における効果的な実習内容の習得については研究課題と考え研究会を重ねてきた。2年次における教師の看護過程へのアプローチの工夫でかなりの成果があげられると思われた。特に看護過程の展開で、学生にとって困難なことは、アセスメントの過程である。そこで看護上の問題の明確化の指導の強化をはかり、その結果実習における学生のコンフリクトは、軽減し実習効果を高めることができた。^{6) 7)}

第2因子〈他人の目が気になる〉については、臨床実習において指導を要する重要な側面と考える。特に青年期では、アイデンティティの確立の時期にあり、自我を見失なうことのないよう指導が必要である。すなわち、実習中の未熟な技術遂行からの脅え、緊張に関して、教師はどう評価す

るか、友人はどう思っているだろうかなど他者の反応が気になる。^{8) 9) 10)}したがって、学生は看護過程においても否定的な患者の反応を、そのまま、嫌われているのではないかなど患者中心というよりナルシズム的傾向でとらえがちである。このような状態は、学習効果を妨げる因子となるから、まず自分自身を大切にすることについて動機づけすることが前提になる。

4. 教師との人間関係

7月は、1年が教師とのコミュニケーションがあるのに対し、3年は減少している。3月になると、3学年の差が小さくなる傾向がみられた。3年次の前期は、ケーススタディ（卒業単位）の課題について、援助者としての教師というよりも評価者という認識からくる警戒心や脅威という学生の構えが影響していると思われる。3年次の7月のQ27.「教師とのコミュニケーションに満足か」は、「はい」が0であったが3月の「はい」「ときどき」を含むと70.3%になっている。学年間の有意差はなかったが、ケーススタディの発表を後期に終えて、指導を受けることの必要性の認識ができたことを意味するものであろう。教師側の因子としては、指導性の問題も課題となるであろう。

V. 結 論

1. 看護学生の自尊感境の受容に関する因子：7つの因子が抽出された。

2. 学年別・時期別の変化：7月に有意差が認められたのは、『聖書のアプローチに対する肯定的反応』『看護への適応』『教師とのコミュニケーション』であった。3月に有意差が認められたのは、『聖書のアプローチに対する肯定的反応』であった。2年は、『看護への適応』が低く、この時期のとり組みは教師側の研究課題として努力している。

聖書のアプローチの全人的統合が看護過程への動機づけになり、その成果を確認した。

今後も魅力ある「看護への動機づけ」を努力してゆきたいと思う。

引用文献

- 1) 筒井真優美他：看護学生の自尊感情と学習環境に関する調査—私立看護大生への質問紙による因子分析—全国看護教育研究会誌，第17号，9，1985。
- 2) 筒井真優美他：看護学生の自尊感性と学習環境に関する研究と今後の課題について，その1，聖母女子短期大学紀要，創刊号，47～57，1987。
- 3) 中西信男・他編：『心理学』10，自我—自己，初版，197～210，有斐閣双書，1981。
- 4) 前掲書 1)
- 5) 和田サヨ子他：聖書的アプローチの自尊感情に及ぼす影響—私立看護短期大生の質問紙による因子分析，カトリック教育研究，第3号（7），3～14，1986。
- 6) 佐藤栄子：臨床実習における看護学生のコンフリクトについて（I），聖母女子短期大学紀要，創刊号，35～46，1987。
- 7) 佐藤栄子：臨床実習における看護学生のコンフリクトについて（II）—2学年の比較—，日本看護研究学会雑誌，10（7），80，1987。
- 8) 小野ツルコ他：看護実習における学グループの緊密性と実習意欲の関連性について，日本看護科学会誌，5（2），40—41，1985。
- 9) 金川克子他：臨床実習における学生側からみた学習効果の検討，日本看護科学会誌，5（2），36—37，1985。
- 10) 金川克子他：臨床実習の学習効果に関する検討——学生の自己評価について——，日本看護科学会誌，6（3），66—75，1986。